

イザヤ書46章1-4節 「運ばれる神」

1A 運ばないといけない神

1B 自分になぞらえた神

2B 重荷

2A 私たちを運ぶ神

1B 愛し、選ばれた者

2B 将来も救われる神

本文

私たちの聖書通読の学びは、44章の途中まで来ていました。午後礼拝では24節から読み始めたいと思っています。そして、46章の最後まで読みたいと思います。今朝は、46章1-4節に注目したいと思います。「1 ベルはひざまずき、ネボはかがむ。彼らの偶像は獣と家畜に載せられ、あなたがたの運ぶものは荷物となり、疲れた獣の重荷となる。2 彼らは共にかがみ、ひざまずく。彼らは重荷を解くこともできず、彼ら自身もとりことなっていく。3 わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。4 あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。」

私たちは40章以降、「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」という言葉のように慰めを心に受けるための言葉を読んでいます。ぜひ、今読んだ言葉から、今朝も慰めを受けてください。それから、「見よ。あなたがたの神を。」という呼びかけもありました。自分でもなく、周囲のこともなく、神ご自身のしてくださっていることに目を向けてください。いま読んだ箇所には、「私たちが運ばなければいけない神」と、「私たちを運んでくださる神」の対比が書かれていました。

1A 運ばないといけない神

1B 自分になぞらえた神

1節と2節に注目してください。これは、バビロンの国がペルシヤ人のクロスによって倒れて、自分たちの神を、その神殿から取り外し、牛車などに載せて運んで逃げていく姿を示しています。当時、国と国の戦いは、神々の戦いであるとみなされていました。国がある国と戦う時に、その国を代表する神が、相手国の代表する神に戦っているとみなしていたのです。したがって、ペルシヤがバビロンを倒した時に、バビロンの住民は自分たちの神々が取り上げられて、奪われてしまうことのないように、こうやって獣や家畜に載せて運ばなければならなかったのです。主はイザヤによって、偶像の神がいかに頼りにならないかをはっきりと示してくださっています。

「ベル」という神は、バビロンの主神「マルドク」の別名です。「主人」という意味を表していて、

カナン人の中のバアルに相当します。バビロンの最後の王ベルシャツアルの名前の中にも使われています。そして、「ネボ」はベルの息子と言われており、知恵や知識の神とみなされていました。ネブカデネザルの名前に使われています。ネボは、毎年、祭りの時に牛の引く車に載せられる行事がありました。ベルとネボは、彼らによって神であったはずなのに、いざという時に彼らを助けることはせず、むしろ彼らの重荷となり、そして彼らを捕われの民としていくような定めの中に入れていました。

私たちは、イザヤ書を読んでいき、ここで「わたしだけが、神なのだ」という神の宣言に数多く出くわします。天と地を造られた方のみが神であって、他に神はいないという宣言です。もし私たちが、まことの神、創造主であられる神以外のものに頼るなら、それが神であり、そのまま偶像であります。「出エジプト 20:3 あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」と主は言われました。ここは、「わたしの前に、ほかの神々があってはならない。」となっています。すべてが神によって造られ、神によって成り立ち、神に至るのに、神の前に何かを置くならば、それが偶像となります。

天地を造られた神の前にひざまずく前に、仕事を置くならば、その仕事が自分にとっての神です。自分は仕事という偶像を拝んでいます。創造主の前に、自分の能力や可能性を置くならば、それがそのまま神となり、まことの神ではない他のものを神としています。「自分がきちんとできていない。」として自分を卑しめている時でさえ、それは自分の能力や知恵に注目しているからで、主なる神の前にそのことを考えているのであり、やはり偶像化しているのです。仕事も、能力も、すべて恵みに満ちた神がくださっているものなのです。ですから、主をあがめ、主に栄光をお返しすることを初めに行なうべきであり、それなくして自分のことを求めているなら、その願望や欲求がそのまま神となっています。そして、過去は力の神をベルとしてあがめ、カナン地ではバアルとしてあがめていました。

自分の楽しみが神の前に来るならば、これもまた偶像です。主は、私たちに良いものを与えてくださり、それを楽しむことを喜んでおられます。しかし、主の中にいる自分を喜ぶのではなく、その楽しみを追及するのであれば、これもまた偶像であります。モアブ人の神ケモシュは、快樂の神でしたが、昔や石でこした神を造っていましたが、自分の心でケモシュをあがめているのと同じなのです。そして、貪りはそのまま偶像礼拝になっていると聖書には書いています。「ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。(コロサイ 3:5)」ですから、キリスト者が貪りを許した時は、とてつもない痛みを伴います。造り主の神の御霊が内におられるのに、偶像を心に引き入れてしまったからです。

ですから、ダビデは主なる神を信頼し、この方に拠り頼むために、「神を前に置いた」と言いました。「詩篇 16:8-9 私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐこと

がない。それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。」創造主である方に自分を従わせると、この方は恵みに富んだ方ですから、私たちの心に安らぎを与えてくださいます。そして、心は喜び、楽しんでいます。

2B 重荷

そして、私たちが偶像を拝んでいると、私たちに重荷を与えます。神よりも自分の願望や欲求を前に置いたら、自分は自由になれる、神というものに束縛されずに済むと思ったら、大間違いです。その反対に、自分のしていることが重荷となっていき、そこにがんじがらめになって抜け出せなくなるのです。自分が何をしているのかも分からなくなる時があります。そして、自分の魂が疲れ切っているのに、なおのことそこから離れられなくなるのです。

イエス様は、「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。(ヨハネ 8:32)」と言われました。それを聞いたユダヤ人は、「私たちは奴隷になったことがない。」と言いましたが、イエス様は「罪を行なっている者はみな、罪の奴隷です。(34節)」と言われます。偶像礼拝について、一般の風習をクリスチャンが避けることについて、未信者の人からしばしば質問を受けます。例えば、仏壇にお供え物をしない、墓前に線香を立てない、そのように避けている姿を見て、「さぞかし、大変でしょう。」という心配をしてくれます。けれども、本人たちはその反対を感じています。「むしろ、墓前で先祖にお祈りするようなことをするほうが、辛いこと。しないことのほうが、ほっとする。」と話します。先祖も、主なる神の与えてくださった存在です。主なる神に感謝を捧げる祈りを捧げたいのに、その造られた人々に語りかけることは、到底できないことです。真理によって自由にされているのです。

クリスチャンになると、お酒を飲まなくなる人が多いです。タバコも吸わなくなる人が多いです。お酒については、「酔いしれてはいけません」という言葉はあり、酒そのものを禁止しているわけではありませんが、お酒を飲みたくなくなります。お酒を飲む動機が、神によって満たされて、無くなってしまふからです。たばこも、神が吸うのをやめなさいと命じられている訳ではありません。けれども、自分を束縛させるようなものは、別に無くしてしまったほうが楽になると考えています。

しかし、主なる神を喜ぶのではなく、自分自身を喜ばせる途端に、自分はその対象に束縛されてしまいます。そのために、その対象物に囚われの身になってしまいます。バビロンの人たちが、ベルやネボを抱えて重荷となって運んでいるけれども、それでもペルシヤに捕えられて、捕囚の身となるのと同じように、私たちに重荷となって、束縛されてしまいます。

そして、疲れてくるのです。バビロンには、星占いや呪文など多くの助言がありました。けれども、神の前に自分の求めていることを置いているという偶像礼拝を行なっている限り、それらの助言はむしろ自分を疲れさせるものなのです。「あなたに助言する者が多すぎて、あなたは疲れている。(47:13)」私たちの周りには、あまりにも多くの助言があります。電車の中の広告で、「楽にお金を

もうける方法」みたいな題名の本の宣伝がありました。私は妻に、「そうだね、こうした本を書いている人は楽にお金をもうけられるね、本を売る印税が入ってくるから。」と言いました。けれども、読んでいる人はお金をもうけられません。いろいろなことを聞き過ぎてませんか？しかし、聞くべきことは数多くありません、いや一つだけです。創造主なる神の霊の聲に聞くことであります。

2A 私たちを運ぶ神

このように、偶像は私たちの重荷となり、私たちを虜にします。では、生きている創造主はどのようにしょうか？「3 わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。」自分たちで神を支え、運ぶのではなく、自分たちが神に支えられ、運ばれているのです。

「胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた」と主なる神は強調しています。主の手は自分が母の子宮の中で形造られている時から、いやその前から既に生まれるように神が決めてくださっていたというのです。ダビデはこう告白しました。「それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。(詩篇 139:13-14)」自分が存在していることが、どんなにか自分ではなく、自分を造られた方に拠っているのかを、受精卵から出産する時までの過程に如実に表れています。

このように、人間の本質は、自分が何かやっているから、ということではなく、神がしてくださっているから、というところに成り立っています。「初めに、神は天地を創造した。」という言葉から聖書は始まります。そして神が何をしておられるのかが中心であり、造られた物、人間もまたその一つですが、神のしておられることに応答するのです。これを「恵み」と呼びます。主は良いお方で、そのご性質から被造物に良くしてくださるのであり、一方的に好意を寄せてくださっているのです。私たちが何かをしたから、良く思われるのではありません。

しかし、「自分が何かをしているから、こうなっているのだ。」と人間は思っています。だから、何か良くないことが起こると、自分に原因を帰して、それを直そうとします。もちろん因果関係はあるでしょう。しかし、それが全てではありません。むしろ、自分が何をしたかしないか、ではなく、主なる神がどうしようとされているのか、そして人間の自由意志を尊びつつ、人間の思惑の中にさえ働いてくださって、ご自分の計画を実現させるのです。ところが、すべて自分の責任で考えていこう、自分の力で、自分の知恵でやっいていこうとすること自体が、罪の始まりです。アダムとエバが罪を犯して、裸であること知り、自分自身で裸を隠そうとしました。しかし神が近づいたら、彼らは怖くなって隠れたのです。「自分で何かをしているから、こうなっているのだ。」という人間主体の考え方は、本来の姿にそぐわず、それが偶像を運んでしまう原因となっています。しかし、主は私たちを運んでおられるのです。

1B 愛し、選ばれた者

ここで、「わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家のすべての残りの者よ。」と呼びかけているのに注目してください。ヤコブ、イスラエルと呼びかけているところに、主がご自分の民として選び、愛して下さった様子がここに描かれています。主は、初めからヤコブを愛しておられました。いつの時からかと言いますと、ヤコブがまだ母リベカの胎にいる時から愛しておられました。「ローマ 9:11-13 その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、善も悪も行なわないうちに、神の選びの計画の確かさが、行ないにはよらず、召して下さる方によるようにと、「兄は弟に仕える。」と彼女に告げられたのです。「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ。」と書いてあるとおりです。」主は一方的に愛して下さり、自分が全く何も愛されるべきことを行なっていないのに、その前から愛して、それで自分を神が選んでくださいました。むしろ憎まれるようなことを行なっている時に、主は憐れんで下さり、私たちが救われるのです。「テトス 3:3-5 私たちも以前は、愚かな者であり、不従順で、迷った者であり、いろいろな欲情と快樂の奴隷になり、悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現われたとき、神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちが救ってくださいました。」

主によってこのように抱かれて、愛されています。エレミヤが預言の働きを行なうことができたのは、彼が生まれる前から神が選ばれておられたからでした。「1:5 わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。」使徒パウロもそうでした。「ガラテヤ 1:15 生まれたときから私を選び分け、恵みをもって召して下さった」と言っています。私たちにどんなことがあっても、主は決して見捨てられません。「ヘブル 13:5 金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」

2B 将来も救われる神

そして主は、将来に対しても運んで下さると約束されています。「4 あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。」これは、素晴らしいことです。生まれる前から自分を運んでおられた方は、これまで自分を運んでくださいました。だから、将来も運んで下さるのだという確信が得られるのです。主の真実は、これからの主の働きに信頼できるようにしてくれます。パウロは宣教旅行で死の危険に会いましたが、救い出された体験がありました。それでこう言っています。「2コリント 1:10 ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちが救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。」

創造主を認めない中での老いは、確かに重荷を背負って、疲れて、暗くなって、それで死んでいく定めの中に置かれるでしょう。若い時は、「自分でこれをやれば、こうなる。」という領域があった

のですが、実は自分ではなく、神が定めておられることなのだと悟るようになってきます。そこで、「何をやっても無駄なのだ。」という厭世観を抱くようになります。その様子をソロモンが伝道者の書に書きました。「12:1 あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。」

しかし、自分は自分の道を切り開いたのではなく、主が良い働きを始められたから、今の自分がいるのだということを実感している人は、将来、主がそれを成し遂げてくださることを期待できるのです。それゆえ、そこには充足感と主が成し遂げられたことに対する喜びで満ちてきます。「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じています。(ピリピ 1:6)」主が完成させてくださるのです。

ですから、神の恵みの中に入ってください。自分で自分のことをやっているのだ、という考えから悔い改めてください。それこそが偶像礼拝の元です。イエスは言われました。「マタイ 11:28-30 すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」重荷を主が負ってくださいます。主は、私たちのしてきたこと、その愚かさや罪の一切を背負って、十字架にかかってくださいました。この方の負わせるくびきは、軽いのです。主が良い働きを始め、私たちをその中に入れておられるので、私たちがその方の命令を守ることは重荷とはならないのです。そこに安らぎがあります。喜びがあります。どうか、主のところに来てください。